

# St. Luke's International University Repository

## Practical Learning Care Skills at Health Service Facility for the Elderly For Better General Practice for Undergraduate students of Nursing.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久代, 和加子, 南川, 雅子, 亀井, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/373">http://hdl.handle.net/10285/373</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 報 告

## 老人保健施設で学ぶ老人看護 —よりよい総合実習をめざして—

久代和加子<sup>1)</sup> 南川 雅子<sup>1)</sup> 亀井 智子<sup>2)</sup>

## 要 旨

1999年度から4年生前期の総合実習において、老人看護領域が新しく始まった。実習目標は、「老いて病む人とその家族が健康状態を最大限生かし、生き生きとしてその人らしい生活ができるように、医療・保健・福祉の専門職と協働して援助できる」とし、希望した8名の学生が老人保健施設で実習を行った。

老人保健施設で実習を始めるにあたり、事前に施設側と打ち合わせを重ねて臨んだにもかかわらず、前半グループの実習ではスタッフとの関係性が十分とはいえず、学生は看護や介護の実務について具体的に実感したり主体的に看護活動を実施するまでには至らなかった。実習方法の改善等により後半グループでは、利用者やスタッフとの関係性が高まる中で主体的に利用者やスタッフと関わり、老人をとりまく種々の社会的状況を統合して老人看護の学びを深めることができた。

また実習科目群の積み上げという視点から、総合実習が中間施設である老人保健施設で行われたことは、保健・医療・福祉の各専門職が協働して援助するという老人看護の特殊性を学ぶということで適切であった。

実習前までの学生の学習状況に応じた、実習環境づくりおよび実習指導体制を整えることにより、よりよい老人看護実習が行えることが示唆された。

## キーワード

総合実習, 老人看護, 老人保健施設, 利用者, 看護, 介護

## I. はじめに

少子高齢という社会現象の中で、新ゴールドプランや介護保険制度など老人保健福祉対策<sup>1)</sup>が進められているが老人医療費の高騰をはじめとして老人をめぐる問題は山積みのままである。このような社会背景の中、本学では1995年から新カリキュラムに変わり、成人・老人看護学の中で老人看護を学んできたが、本年度から老人看護学が領域として独立して教育にあたることになった。また今年から初めて総合実習に「老人看護」が加わった。

本学における総合実習は、表1のカリキュラムの構造でも明らかなように、実習科目群の積み重ねの上に成り立っており、4年前期で希望を出した学生に対し

- 1) 聖路加看護大学講師 (老人看護学)
- 2) 聖路加看護大学助教授 (老人看護学)

表1 実習科目群の構造

4年前期	総合実習
4年前期 3年後期	地域看護 臨地実習 小児看護, 精神看護, 老人看護, 急性期看護, 慢性期看護, 母性看護
2年前期	看護援助論IV

表2 総合実習の目標

1. 関心のある看護領域において、対象と環境との相互作用を力動的に把握し、対象の最適健康状態を生み出すことができるよう、メンバーの一員として主体的に自らの役割と機能を発揮し、働きかける能力を養う。
2. 看護実践を通して、看護の専門性について考え、自らの看護に対する看護観を深める。

表3 実習期間・実習目標・具体的目標について

実習期間：前半4名 1999年6月14日(月)～6月25日(金)  
後半4名 1999年7月12日(月)～7月23日(金)

実習目標：老いて病む人とその家族が、健康状態を最大限生かし、生き生きとしてその人らしい生活ができるように、医療・保健・福祉の専門職と協働して援助できる。

#### 具体的目標：

1. 老人保健施設の意義、およびそこで働く人々の役割について理解できる。
2. 入所している老人を身体的・心理的・社会的および生活の多面的側面から捉え説明できる。
3. 入所中および退所後のその老人にとって望ましい自立した生活像を明らかにできる。
4. その老人にとって望ましい自立した生活が送れるようにするための、老人および家族に対する個別的な援助を明らかにする。
5. 4で明らかになった援助について、チームにおける看護の役割を理解した上で、チームの一員として実施するための方策を考える。
6. 5で考えた方策を他のチームメンバーと協働して実施する。
7. 実施した援助について評価する。
8. 老人および家族の価値観を尊重し、学生としてまたチームの一員として誠実な態度で関わる。
9. 老人保健施設で過ごす老人および家族との関わりを通して、老人看護について自らの考えを深める。

て実施されている。表2は総合実習の目標である。

総合実習の場としては、臨地実習Eで急性期対応型の一般病院における老人看護を学んでいることを踏まえ、老人の長年住みなれた地域にある保健・医療・福祉の統合されている老人保健施設<sup>2) 3)</sup>を選んだ。ここでは各専門職が1つのチームとなって通所・入所している老人を支援している。実習においてはそのチームの中で看護の専門性を学ぶことに重点をおいた。

実習は希望した8名の学生に対し表3に示すように、あらかじめ決められた実習期間中に、実習目標・具体的目標を定めて実施した。

実施場所は、東京都足立区にあるS老人保健施設である。この施設は1992年に設立され、これまでは主にヘルパーや准看護婦養成の学生実習を受け入れてきていたが、看護系大学の実習ははじめてであった。S老人保健施設の施設概要を表4に示した。

## II. 前半グループの実習の展開

### 1. 前半グループの実習方法

#### 1) 施設側への働きかけ

施設長(看護職)および療養部長(理学療法士)と、事前に実習環境を整えるための話し合いおよび実習要項の内容についての説明会を持った。この他に、施設長とファックスで細かい情報の確認を行った。なお、看護主任は前期の実習期間中、研修のため不在であった。療養室のある2-4階のケアリーダー(介護職)およびサブリーダー(看護職)を含むスタッフには、実習目標・具体的目標・実習期間およびスケジュール・実習者名簿を含む一覧表を配った。

#### 2) 学生に対する働きかけ

学生には初日のオリエンテーションおよび学生カンファレンスにより、中間施設としての老人保健施設、および老人保健施設における看護の果たす役割について理解できるようにした。個々の内容は下記のとおりである。

初日オリエンテーション：

- ①施設概要および各階の特徴について(施設長)
- ②実習要項に基づいたオリエンテーション(教員)
- ③介護保険制度の説明(教員)

老人保健施設で使われているアセスメント票の理解のため

学生カンファレンス：

目的；

- ①老人保健施設において他職種と協働していく中で、看護の果たす役割について理解を深める。
- ②各自が受け持っている利用者および実施しているケアの情報を共有する。各自が実習中に経験していることや学習したことを共有する。
- ③実習中に関わりのある老人のケア等を通して、老人がどのように社会からサポートされているかについて理解を深める。

テーマ：

- ①老人保健施設における看護職の役割について(施設長)
- ②各学生の受け持ち利用者への関わり共有化  
実習のまとめ：最終日にどんな学びをしたのかについて話し合う。

#### 2) 具体的な実習手順

施設からの要望で学生人数配置を2階1名、3階2名、4階1名とする。学生は原則として1名の利用者を受け持つが、積極的に他の利用者とも交流を持つようにする。

受け持ちとなる利用者は、各階のケアリーダーからオリエンテーションを受けた後、援助の度合いや背景等を考慮し実習初日に学生自身が決める。記録

**表4 S老人保健施設の概要**

**施設の目的：**老人の生活自立と在宅介護支援

**対象：**老人医療受給者証を持つ70歳以上の老人  
 病状が安定していて入院の必要はないがリハビリ、看護、介護が必要な老人痴呆症がある老人  
 65～70歳で障害認定を受け、老人医療受給者証を持っている人  
 40歳以上で初老期痴呆（アルツハイマー病）の状態の人

**入所定員：**100名（うち短期入所50名）

**通所定員：**50名

**職員構成：**事務職3+(2)名、理学療法士2名、作業療法士1名、  
 介護職（介護福祉士・ヘルパー）48+(1)名、相談員3名、看護婦3名、准看護婦7+(1)名  
 （）内はパート勤務

**提供されているサービス：**

入所ケア、短期入所ケア（ショートステイ）、通所ケア（デイケア）、相談サービス

**施設構造：**

1階 一般浴室、特殊浴室、機能訓練室、レクリエーションルーム、通所者デイルーム、カラオケルーム、カルチャールーム、相談室、理美容室、売店  
 2～4階 療養室（4人部屋21、2人部屋3、個室10）

**併設施設：**診療所

**療養室の日勤帯の体制：**

- 1) 2～4階の看護職および介護職の配置は、各階それぞれ2階（2名、4～5名）、3階（3名、7～8名）、4階（1名、4名）となっている。
- 2) 深夜から日勤者（全員）へレポート、施設長および他の部門からの連絡事項の伝達
- 3) 各階のリーダー（介護職）は、その日の予定を含めて、日勤業務の確認と割り当てをする。
- 4) サブリーダー（看護婦）は、医療看護に関するレポートを全員にするとともに与薬や注射、褥そうの処置などの業務割り振りをする。
- 5) 各階のリーダー（介護職）は、選番担当者に夜勤帯の報告・その日の業務の確認と割り振りをする。

は観察したことなど担当教員のチェック後、施設の所定の記録用紙に書く。

目標を達成するために、退所判定会議、初回/中間カンファレンス、各種プログラムおよびデイケアにおける1日実習に参加できるよう考慮する。また必要時、④かもめ訪問看護ステーション、⑤つばめ訪問看護ステーション、⑥かるがもヘルパーステーション（24時間巡回サービス）、④梅田診療所、⑤福岡クリニック等で見学実習することも可能である。

また利用者を包括的に理解して援助のあり方を考えたり、老人看護に対する考えを深めるために最終日のまとめのカンファレンスを含め学生カンファレンスを3回行う。

以上のような準備をして実習は始められた。実習

前のアンケートによると、表5に示されているように、学生は不安というよりはたくさんの抱負をいだいて実習に臨んでいた。

## 2. 前半グループの学生の学び

前半グループの学生がどのように学んでいたのかについて、具体的目標にそって学生の日々の記録に見られるものを表6に示した。

## 3. 前半グループの実習評価

### 1) 施設側のコメント

・療養部長のコメント（まとめのカンファレンスから）

- (1) 痴呆老人が多いので今までの臨床実習経験を生かせなかったのではないかと。

- (2) 施設では家庭に少しでも近い対応を心がけている。
- (3) 医療面から一歩離れたところからの対応が必要。
- (4) 老健の看護婦・介護職の動きを知る実習を1日づつ入れる必要がある。
- (5) 学生の実習と日々の業務がすれ違っていることがあった。(職員はミーティングをしているのに学生は利用者のところにいるなど。)

## 2) 実習終了後のアンケートから

学生が実習を通して学んだこと、改善してほしいと思ったこと、および感想について表7に示した。

### Ⅲ. 実習方法の改善

前半グループの実習を振り返ってみて、実習を行っていく上でやはりにくさを学生、施設側(スタッフ)、教員がそれぞれ感じていたことがわかった。Ⅱ-3で述べられているような意見を踏まえ、後半の実習方法を改善するための話し合いを施設側(施設長・療養部長)と教員とで行い改善案を作成した。

#### 実習方法の改善策

- 1) 具体的実習目標に、「老人保健施設の意義およびそこで働く人々の役割について理解できる」という項目を追加した。
- 2) 実習初期に、介護職・看護職にそれぞれ1日マンツーマンでつき、職員と利用者とのやりとりを見学しながら老人保健施設における看護と介護の機能、利用者への接し方および1日の業務の流れを理解する機能別実習を入れる。
- 3) 受け持ちにする利用者の基準は、初回/中間カンファレンスで検討される利用者であり、実習期間中に退所しないこと、またある程度のコミュニケーションがとれることとし、あらかじめケアリーダーに選択を依頼しておく。
- 4) 業務を理解する実習を2日間行い、その期間中に受持ちを決める。
- 5) その日のケアリーダーまたはサブリーダーに学生指導の役割を持ってもらい適宜コメントをもらう。教員は各階で業務の流れを中心に学生を見守る。
- 6) 初日オリエンテーションで施設の概要、各階の特徴、入所から退所までの流れおよび各専門職の役割について、療養部長から説明を受ける。
- 7) 2回目の学生カンファレンスで施設長から老人保健施設における課題について話を聞く。また最終日のまとめのカンファレンスでは、その話をふまえて実習を振り返り学んだことを話し合う。

### 表5 実習前のアンケート(前半グループ)

#### 抱負:

- ・老人保健施設における看護職の役割を学びたい。
- ・介護職、OT、PTの視点を知り学びたい。
- ・積極的に多くの利用者と接したい。
- ・老人保健施設で生活する高齢者の生活状況をわかりたい。
- ・地域でどう障害や疾病を抱えながら暮らしているのか、その人を取り巻く全体像を知りたい。
- ・入所者に対してできる限りの看護ケアを行う。
- ・欠席や遅刻をしない。

#### 不安:

- ・病院とは違う施設なのでどう動いていいかわからない。
- ・1日の流れなど、何から何までわからない。
- ・雰囲気かわからない。

- 8) 日々、学生と教員とのショートカンファレンスを行う。
- 9) 別紙資料1「ケアリーダーの方へのお願い、看護職の方へのお願い」を作成し、療養部長から各階のリーダーにミーティング時、説明しながら渡してもらう。
- 10) 介護保険制度についての説明は、実習前に学内で済ませておく。

### Ⅳ. 後半グループの実習展開

#### 1. 後半グループの実習方法

前半実習後の話し合いの後に作成された実習方法の改善策に基づいて実施した。学生カンファレンスは、初回に受け持ち利用者の情報の共有化、施設の状況がつかめた頃に施設長から話を聞けるように変更した。時間も施設側から療養部長またはスタッフが参加できるように設定した。

1回目カンファレンス：情報の共有化を目的とした。

2回目カンファレンス：老人保健施設における課題(看護の課題も含む)について施設長から聞く。

実習のまとめ：施設長の話をつまえて実習を振り返り、老人保健施設で実習して学んだことなどについて話し合う。

#### 2. 後半グループの学び

後半グループの学生がどのように学んでいたのかについて、前半グループと同様に具体的な目標にそって日々の記録に見られるものを表8に示した。

表6 日々の記録にみる学生の学び(前半グループ)

目 標	内 容
1. 老人保健施設の理解	*前半グループにこの目標はない。
2. 利用者の把握 3. 生活像の明確化 4. 個別援助	<p>老人保健施設では、寝食を別にすることや日中はベッドから離れてデイルームで過ごすよう指導されており、ほとんどの利用者は食事・おむつ替え・睡眠以外はデイルームに集まり、集団リハビリやおやつテレビ鑑賞で過ごしている。そのため学生はデイルームという他の利用者の大勢の中で受持ちの利用者に関わっていくことが多かった。</p> <p>そのような状況の中で学生は、利用者が様々な疾患を抱えて集まっているというよりは共同生活の場であることを実感していたが、どれだけ個々の在宅での生活に近づけられるか難しいと感じることも多かったと述べている。それは施設のきめられた時間の流れ(食事・おむつ替え・おやつ・リハビリ・入浴など)があるため、受け持ちの利用者が珍しく自発的に「ベッドから起きようかな」と発言したものの、しばらくしたらおむつ替えがあるのでベッド上で待機してほしいとスタッフからいわれ、まだ時間はあるのと思っても何もいえず悔しい思いをしたという記録にもみられた。またデイルームから居室に戻りたいと何度も訴える利用者はまだベッドに戻ってはいけないと伝えなければならない時にもジレンマを感じていた。学生には、受け持ちの利用者に関してはスタッフに了解をとってから主体的に援助計画を実施すること、受け持ち以外の利用者に対しては深くかかわれないので、せめて訴えを受け止めるような言葉かけをしたり車椅子の座り加減を直したりするようアドバイスした。</p> <p>デイルームで漫然と一日を過ごすことについて、学生にとっては変化もなく退屈に思えても老人にとってはそれなりに満足して充実しているようだ和理解している学生もいたが、ケアの比較的小さい利用者を受持っていた学生は初めの意気込みとは違い、何をしてもいいかわからずぼんやりして当惑している様子がみられたため、教員は、多くの利用者が集まっているデイルームで受け持ちの利用者にだけケアをするのではなく周囲の利用者へも声をかけたり食事介助をしたりなど配慮するようアドバイスをした。施設長からも特定の人だけに関わることは、まわりにいる利用者が寂しい思いをしてしまうかもしれないので十分配慮して行動するようにといわれていた。</p> <p>受持ち利用者の家族への援助は目標にも含まれていたが、実際には面会がなかったり実習時間中に会えないことが多く、介護負担を減らすための働きかけを計画していた学生は実施できなかった。一方1階ホールで行われているデイケアへの参加実習で、実際に家までの送迎に参加してみてこの地域の老人はどんな環境にある家に住んでいるのか、家の中はどんな改造がされているのか、家族にどのように送られてくるのか(迎えられているのか)、その他1人暮らしと家族と共にいる人のスタッフのかかわり方の違いなど良く分かったと述べている。しかしながら受け持ち利用者の家族についての理解がより深まったわけではなかった。</p> <p>利用者を多面的に捉えることについて、カンファレンスで検討された利用者を受持っていた学生、自宅で世話をしていたヘルパーに会えた学生はより明確な情報を集めることができたことと述べていた。</p>
5. チームの一員としての方策 6. メンバーとの協働	<p>学生の記録に、「受持ちではなかった利用者が異常を訴えていたにもかかわらず、看護婦に伝えていかどうかかわからず躊躇しているうちに午後になり、結局看護婦が気づいた。」「ここでケアを実施しても良いのだろうかと遠慮したり引いたりしていた。」とあった。これらは明らかに学生とスタッフが密に関わりをもっていなかった状況をあらわしている。教員は、スタッフに気軽に聞きなさいとはアドバイスしていたものの、しっかりとした関係性ができていなかったため必要最小限しか聞けず、スタッフと一体になり支援できたと感じる学生はいなかった。スタッフと情報交換や実際の方策の検討ができなかった分、教員が補うことになったが教員の持つ情報もケアリーダーやスタッフには及ばない。学生はケアリーダーやスタッフと主体的になって情報の交換をすることはできていなかった。このことは、「看護、介護についてはすべて看護に含まれているものなので区別するといわれても良く分からない」、「看護の視点を介護職との協働の中でみつけるのは困難」、「各専門職の役割を考えながら援助を考えたが協働するとはよくわからない」との記録にも表れていた。</p>
7. 援助の評価	<p>目に見えた変化がなかったり利用者が外泊してしまったりした学生は看護をした実感が無いといって評価を低くしていた。その他の学生は最も重要と考えていた看護問題に対して個別に対応できていたことで良い評価をしていた。</p>

表7 実習終了後のアンケートから（前半グループ）

(1) 実習を通しての学び

- ・老人保健施設における専門職とその役割について
  - ・老人保健施設で働く他職種との役割や看護職として必要な視点を学べた。
- ・看護と他職種との連携、協働について
  - ・他職種が1つのチームとして個々の援助に関わるということを実際に見て体験して学ぶことができた。
  - ・他職種との協働について少しわかった。
  - ・今までの病院実習では他職種との協働といってもPTやSWと関わることはできなかったが今回の実習では、ケースカンファレンスの時などは特に、その特色が出ていてとてもいい学びの機会だったと思う。
- ・老人保健施設における老人を見る視点および関わり方
  - ・3年の実習では体験できなかった痴呆高齢者との関わりや、大勢の高齢者との関わり、また老人保健施設という場での実習という様々な新しい環境で、介護職の人がどのように考え働いているのかかき間見ることができ、自分の高齢者に対する言動や接し方を振り返ることができた。
  - ・入所している老人に対して、現在起こっていることだけではなく、その人の退所後の生活や人生など長い目で見た援助や関わりを考えていくということが大きな学びになった。
  - ・中間施設に入所・通所している利用者の援助を通してどの程度具体的に関わっていけば良いか実感した。
  - ・とても多くの老人と関わることで老人の特徴が簡単にイメージづけられるようになった。
- ・実習方法
  - ・多くの利用者に関わりながら受持ちを見ていくということがこれまでの実習と非常に異なる点であり大きな学びになった。

(2) 改善点

- ・受持ち利用者の決め方
  - ・多数の利用者の中から自分で受持ち利用者を選ぶのは何の基準もなく難しかった。
- ・施設側に対する実習への理解について
  - ・私たちの実習形式をもっと施設側の人に知ってもらいたい。
  - ・実習目標が受け入れ側に明確に伝わるようになれば、お互い理解しやすいかもしれない。

(3) 感想

- ・実際やっている仕事は浅くしか見ることができなかった。
- ・今までの実習病院とは違う面が多くて戸惑うことの多かった実習だったけれど、自分で考えていろいろ見つけていくという面ではよくやれた。
- ・すべてが今までの実習にない体験で戸惑いも多くあったけれど、振り返ってみるととても楽しかった。
- ・受持ち以外の方とあんなに多く接し、考えられるというのも一般病院ではできないことですごく新鮮だった。
- ・今までは疾病を通して患者を見ていたが、今回の実習ではその人の生活と自立ということで全く視点が異なるためはじめは難しく感じた。

3. 後半グループの実習評価

1) 施設側のコメント

- ・療養部長のコメント（まとめのカンファレンスから）

(1) 準備について

療養部長から各階のケアリーダーおよび看護職に対して、実習中の役割について資料を用いて説明したが、教員が直接説明した方がよい。

(2) 受け持ち利用者を決めることについて

ケアリーダーがあらかじめリストアップしておく事は負担にもならずよかった。

(3) 利用者のカンファレンスへの参加の仕方

カンファレンスで検討される人の概要がわかって参加したほうがよかった。

(4) 申し送りについて

朝と終わりの申し送りには参加したほうがよい。

(5) 学生の学びについて

- ①学生が受け持ちの利用者に合ったケアを1つのチームの中でどう展開するか難しいと知っていることについて、もっとスタッフに相談してほしい。そのケアについて同意を受けると

表8 日々の記録にみる学生の学び（後半グループ）

目 標	内 容
1. 老人保健施設の理解	<p>実習初日から2日間の業務機能別実習を行ったことで、一日の業務の流れをつかみ看護婦および介護職の役割について学んでいたことが、次のような学生の記録にも見られた。</p> <p>「看護と介護を切り離して考えることは困難であり、両者が協働して利用者の生活を支え、安心して落ち着いた生活を送れるようにすることが重要である。そのため看護は、何を観察し、どのように働きかければよいか、その人にとって必要なケアは何かを見極める目をもつことが重要である。」「介護の役割からはずれる範疇である身体的問題が生じた際には看護が中心になって機能する。」「老人保健施設では、病院よりも在宅での生活を見据えたケアが必要である。」</p> <p>またデイケアの実習では、参加者のもつ疾患やADLの状況の多様さ、スタッフが参加者の多様なニーズにタイムリーに答えていく必要性などを学んでいた。また、わずかではあるが地域に住む老人の生活に直に触れることができていた。</p>
2. 利用者の把握	<p>学生はデイルームにいる利用者のケアを介護職と共に行いながら、受け持ち利用者との関わりをもっていた。従って学生は、集団のなかで受け持ち利用者に関わるという、これまでにない実習環境におかれていた。学生はこの環境に戸惑い、他利用者のケアに追われるなど、受け持ち利用者へのケアと他利用者へのケアとのバランスをつかむのに苦慮していたため教員はその点に配慮してアドバイスした。しかし、最後まで個と集団へのケアのバランスがつかめなかった学生もあり、この学生は受け持ち利用者を多面的にとらえるという点では、心理的側面または社会的側面の何れかを十分につかみきれず不安全感を感じているようであった。</p>
3. 生活像の明確化 4. 個別援助	<p>利用者ファイルおよび受け持ち利用者との限られた時間での関わりによる情報収集では十分な情報が得られないことが多かった。しかし、中間/初回カンファレンスに参加して看護職・介護職・理学療法士・相談員（ケースワーカー）が個々の情報を共有し、ケアプランの見直しをする場に参加して得た情報を学生自身が情報収集したものと統合することにより、利用者の望ましい生活像を具体的につかむことができ、それに対応した援助を明らかにすることができた。しかし、援助の焦点が家族との関係性である場合には、学生は援助方法を考える際に、看護の限界を感じていた。また、受け持ち利用者の中には介護保険が開始されると現在のサービスを受けられない可能性の高い者もあり、今後誰がどのようにその人と家族の生活を支えるのか思案する場面もみられた。</p>
5. チームの一員としての方策	<p>中間/初回カンファレンスに参加して各チームメンバーからの情報と、学生個々が自分自身でつかんだ利用者像とを重ね合わせて明らかにしていた。不足している利用者の自宅や在宅介護に関する情報や、フロアで行うリハビリテーションに関する情報などは、個々のチームメンバーに積極的に相談して収集することができた。</p>
6. メンバーとの協働	<p>前述のように、援助を考える段階で各チームメンバーに相談することはできたが、考えた援助をチームメンバーに知らせて協働して実施するところまでには至らなかった。これは、多くの学生が援助を明らかにできたのが実習の終わりに近づいてからであったこと、また考えた援助をチームメンバーにどのように伝えたらよいかという方策がわからなかったことなどが要因と思われる。</p>
7. 援助の評価	<p>多くの学生の自己評価が低かった項目である。この理由を学生の記録からみると、「リハビリテーションをして身体機能の回復をはかるということに関して、2週間という短い関わりの中で、明らかな変化がみられなかった。」「他利用者との交流の機会が増えるという目標は達成されたが、その他の目標は達成されなかった。」など援助の目標が達成されなかったために援助に対する評価が低く、それに伴って自己評価が下がったものと思われる。その他、「援助の目標は、退所後にその人が在宅で事故を起こすことなく生活できるということであり、退所して自宅で生活してみなければ評価できない。」という報告もあった。</p> <p>一方自己評価が高かった学生は、受け持ち利用者の生活が思い通りに改善し援助の目標が達成されていた。これは、実習の比較的早期に援助を計画し書面化していたため、看護婦や介護職から得たフィードバックを基に、適宜援助の修正を行いながら実習することができたためと思われる。</p>



表9 実習終了後のアンケートから（後半グループ）

(1) 実習を通しての学び

- 老人保健施設の役割
  - ・ 病院と在宅の間としての施設の目的が理解できた。
  - ・ 教科書では分からない老人保健施設の実態について学ぶことができた。
  - ・ 施設の地域とのつながりについて学ぶことができた。
- 他職種との連携
  - ・ 始めから決められた期間で、しかもリハビリ目的の入所の場合には、順調に帰るために過剰なケアをしてはいけない。そのためには看護だけではケアが困難であるため、他職種との連携が大切であることを学んだ。
  - ・ 施設の中で働く様々な職種と協働することについて理解できた。
- 高齢者への接し方
  - ・ 老人との関わりがうまくできるようになった。
  - ・ 施設で働くスタッフから、老人に接するときの優しい態度や、サービス提供者としての態度、仕事に対する熱心な姿勢を学んだ。
  - ・ 忙しくなるとつい口調がきつくなる自分に気づいた。
  - ・ 老人は、いくつになっても自分に注目してほしいという気持ちがあることが分かった。
  - ・ 高齢でも状態が向上するということを学んだ。
- 老人保健施設における看護
  - ・ 楽しく居心地のよい雰囲気は自然発生するというより作り出すものであるということが分かった。
  - ・ 老人保健施設の看護職のように、看護が自立してできる仕事はおもしろい
  - ・ 退院後のことを考えてケアすることを学び、退院を目指したケアは創造力が必要であることが分かった。
  - ・ 施設利用者のニーズや生活について知ることができた。

(2) 改善点

- 実習期間について
  - ・ 実習期間中に休日が入る場合には延長して実習してほしい。
  - ・ 分かったような気になったときに終わってしまったのであと3日くらいは実習期間があったほうがよい。
- 受け持ちの利用者の決め方
  - ・ 1週目の終わりに中間カンファレンスで検討される人を受け持つ方が、看護活動として発展させやすいし、自分の行ったケアに対する評価も得られる。

(3) 感想

- ・ 機能別実習2日間とデイケア参加はとても勉強になったので続けてほしい。
- ・ 始めに機能別実習をするのは良かった。
- ・ 施設の人がとても親切で、忙しい中でも質問に答えてくれて有り難かった。
- ・ 今までの実習のまとめとしては良かったが、もっと受け持ちの利用者と関わりを持ちたかった。
- ・ 今までの実習のように「させられている」という思いになることなく実習できた。これは、利用者の生活援助が中心であるため、老健施設の看護が他職種と協働する中で自立的であるためと思う。
- ・ 老人保健施設での実習は、病院と異なる部分が多くあり、比較することができて、興味深い実習であった。
- ・ スタッフの方々の関わりを見ていて、とても楽しそうにケアをしているのが印象的で、その対象者をよく知ったケアが提供されていると思った。
- ・ 痴呆をもった老人は、ケアが大変というイメージがあったが、利用者はそれぞれ、ついほほえんでしまうような反応を見せてくれて、老人をケアする楽しさを知ったような気がした。

同時に共通の理解で関わっていける。

②機能別実習の1日目に受け持ちの利用者が決まっていると、2日目の時その受け持ちの利用者にどのようにかかわっているかがよくわかり理

解が深まるのではないかと。

(6) スタッフ、教員、学生の関係性と役割について  
①スタッフからみて、学生や教員の動きは把握しきれなかった。

②教員—学生—スタッフの関係性がよくわからなかった。

③教員の役割がよくわからなかった。

2) 実習終了後の学生アンケートから

学生が実習を通して学んだこと、改善してほしいと思ったことおよび感想について、表9に示した。

3) 自己評価(4段階評価)

実習終了後、学生が目標ごとに記入した自己評価の点数を前半グループ4人と後半グループ4人について個別およびグループ別に検討した。

表10は4人の目標ごとの平均値である。また図1はそれをグラフに表したものである。なお、「具体的目標1:老人保健施設の意義やそこで働く人々の役割について理解できる」は、後半グループのみに加えた目標である。

表10 各グループの自己評価の平均値

	前半グループ	後半グループ
目標1	*	4.00
目標2	3.25	3.25
目標3	3.25	3.50
目標4	3.25	3.25
目標5	2.50	3.50
目標6	2.25	3.50
目標7	2.75	2.75
目標8	3.50	4.00
目標9	3.50	3.75

\*前半グループに目標1はない。

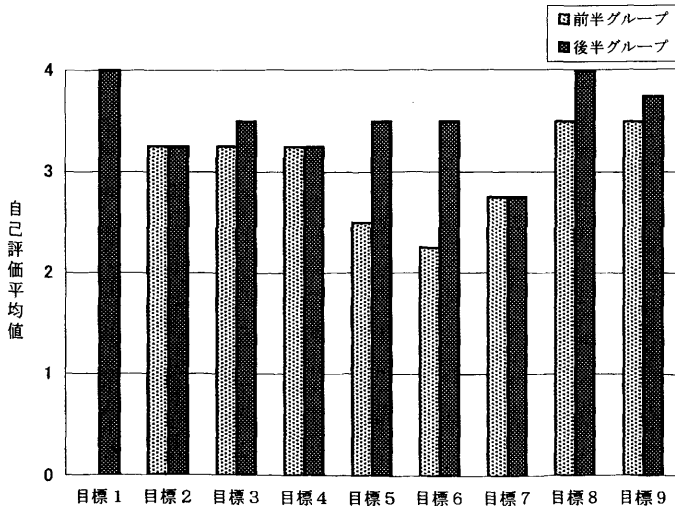


図1 実習グループ別自己評価平均値の比較

前半と後半の自己評価の結果を比較してみた結果、(1)~(4)のことがわかった。

(1) 2つのグループで差がなかったのは看護過程に含まれる以下の3項目であった。

- ①利用者のプロフィールの把握
- ②個別援助を明らかにする
- ③実施した援助の評価

(2) 前半グループには後半グループより自己評価の高かった項目はなかった。

(3) 後半グループの方が自己評価が高かったのは下記の5項目であった。

- ①入所者の望ましい生活像を考える
- ②チームの一員として実施するための方策を考える
- ③考えた方策をチームメンバーと協働して実施する
- ④価値観の尊重とチームメンバーの一員として関わる
- ⑤老人看護について自らの考えを深める

(4) 前半グループと後半グループの差が著しく大きかったのは、下記の2項目であった。

- ①チームの一員として実施するための方策を考える
- ②考えた方策をチームメンバーと協働して実施する

V. 考察

老人保健施設で初めて総合実習を行うにあたり、どのように実施するのが学生にとって一番よいのか事前に十分検討して実習に臨んだつもりであったが、前半グループの実習中はスタッフと一体感が持てず主体的な看護活動をできないうちに終っていた。そのため実習終了後、学生の意見を参考にしながら施設側と教員でよく話し合い問題点を明らかにし実習方法に改善を加えた。その結果、後半グループの学生はスタッフとよい関係性を保ちながら主体的に看護活動ができるようになった。

前半、後半の両グループで自己評価に差がなかったのは主に「看護過程の展開」に関わる項目であった。これは3年次の臨地実習でこの課題が繰り返し実施され、しっかり習得されているからと思われる。

その他の項目は、後半グループで自己評価が高くなっていった。これらは、各階のケアリーダーに学生指導の役割を持ってもらったこと、1日ずつ看護婦や介護職について業務を

## 資料1

### ケアリーダーの方へのお願い

下記の項目に関して実施、ご指導頂きたいのでよろしくお願いいたします。

#### 1. 実習初日

11:00~12:00 フロア毎のオリエンテーション

各フロアで、学生が受け持たせていただく「利用者」の紹介

\*受け持ち「利用者」の基準

- ①初回中間カンファレンスに取り上げられる
- ②実習期間中に退所しない
- ③ある程度のコミュニケーションがとれる。

#### 2. 実習2日目、および3日目

各フロアにおける仕事の流れの理解、および職種の役割について学ぶため、1日ずつ、一人のケアワーカーとナースについて終日実習しますので、一緒にケアをしてくださる方を決めてください。

#### 3. 毎日のこと

朝の申し送りの後で、その日の行動計画等についての報告、午後の申し送りの前に、終わりの報告をしますので何かアドバイスがあれば学生に伝えてください。行動計画に関する記録用紙は、所定の場所へ提出しますので、ご確認をおねがいします。報告する時間については、各フロアの状況に合わせて学生に指示してください。

なお、5時までに、「毎日の行動計画」の記録を提出しますので、コメントをお願いいたします。

4. 実習中に様々な質問をしたり、気になる行動をとることがあるかもしれませんが、お気づきのことがありましたら、その場で遠慮なくご指導ください。
5. スタッフの方々にも、ご迷惑をおかけすると思いますが、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。
6. その他お気づきのことがありましたら、遠慮なく教員に声をかけてください。

### 看護職の方へのお願い

1. 利用者の身体的なこと、看護に関すること、その他について各フロアの看護職の方へ質問すると思いますが、ご指導をよろしくお願いいたします。
2. 実習中に様々な質問をしたり、気になる行動をとることがあるかもしれませんが、お気づきのことがありましたら、その場で遠慮なくご指導ください。
3. その他お気づきのことがありましたら、遠慮なく教員に声をかけてください。

1999.7.8 聖路加看護大学 実習担当教員

共に行う機能別実習をしたことで各専門職の業務内容を十分つかむことができたこと、そしてそのことによりスタッフとの関係性がよりよくなり、自らの動きについて見通しが立てられたことでよりよい影響が出たものと推測される。またアンケートの内容の細部を比較してみると、後半グループの学生のほうが、施設の地域で果たす役割、高齢者の全体像、スタッフの業務内容、専門職の果たす役割について言語化できていて、より具体的に把握できていることがわかった。前半グループの学生の意見を受け止め、施設側とよく話し合

った改善策が有効であったといえる。しかし、最後の施設側との反省会で「学生、教員、スタッフの関係性がわからない」「教員の役割がわからない」という声が依然としてスタッフの中にあったということがわかり、施設側がこれまでは臨床指導の教員を伴わない実習を引き受け、各階のリーダーが主体的に学生指導に関わっていたという経験により、教員がついている本学の実習スタイルに馴染めなかったことが大きかったと思われる。後半で施設側に依頼する実習指導の役割を文書化して明確にしたが、今後さらに検討を要する

課題である。

後半グループの学生が主体的に利用者やスタッフに関わることができたことは、その他の要因もいくつか考えられる。後半グループの学生は地域看護の実習を終えてこの総合実習に臨んでいたが、前半グループの学生は未習であった。このことが学びにどのような影響を及ぼしたかは明らかではないが、地域看護の実習で保健所実習や訪問看護ステーションの実習を通して在宅で健康問題に取り組んでいる人々の実際をみて、社会資源の活用など看護婦や保健婦とともに考えてきているとすれば、中間施設である老人保健施設の機能についてもより深く個人のニーズに関連づけて考えられたのではないと思われる。

一方、実習科目群の積み上げという視点からみると、看護援助論で対象の理解と基本的技術を学び、臨地実習で医療の現場においてどのように老人に看護が提供されているのかを学んできた学生が、保健・医療・福祉の各専門職の連携、特に福祉との協働に関わることの大切さを大いに学べたと考えられる。今回の学生は3年次の老人看護の臨地実習を急性期対応の一般病院で実施してきているため、家庭での日常生活を意識した実習はあまりできていない状態で老人保健施設の実習に臨んでいた。それゆえ疾患としては安定期にあっても病態的にはあまり変化のない受け持ちの利用者に「何かしてあげなくては」「何がここでできるのか」など自分の生活のペースで対象者をみてしまい、何もできないことに焦りを感じる学生もいたのではなからうか。

今回、老人の身体的、精神のおよび社会心理的アセスメントは、実習中または直前に介護保険で用いられているアセスメント票<sup>4)</sup>を用いて説明したが、どの学生も実習中にこのアセスメント票を有効に活用することはできなかった。今年の4月からは、介護保険が実施されていくので老人への支援を考える時、介護保険抜きでは考えられない。そのためにも、実習前に介護保険の制度や仕組みを十分理解しておく必要がある。今回は実習オリエンテーションの中に組み込んだが、今後は統合カリキュラムに組み入れられるよう見直す必要がある。

今回の学生が老人看護に対してどのような考えを持ったかについては、日々の記録に詳細に述べられていた。老人保健施設の特徴であるデイケアやリハビリに参加実習することにより多くの生き生きとした老人と接する機会を持ち、老人へのイメージが変わったり、デイケアを利用しながら入退所を繰り返している利用者へ接して、地域で中間施設として活用されていることの重要さを感じていた。しかし、もう少しリハビリなど専門的で緻密な支援ができればもっと動けるようになったり元気になれるのにその支援ができなかった

ことや、ベッドから離れたくないという老人を無理に起こし、デイルームでぼんやり車椅子に座ったままにいる老人の姿をみてジレンマを感じたこと、ゆっくり話相手になりたいと思っても忙しくて汗びっしょりで駆け回って時間がとれないでいるスタッフの姿などに老人保健施設の限界を感じていた。石山<sup>5)</sup>がいうように老人保健施設も老人病院で行われている個別的で全人的なケアをめざして更なる改革が必要となってくるのだろう。

老人保健施設における実習を振り返ってみて、実習を受けるまでの学生の学習状況、実習環境づくりおよび実習指導体制を整えることにより、よりよい実習が行えることが示唆された。

## VI. まとめ

老人保健施設における実習をはじめにあたり、事前に施設側との打ち合わせを繰り返し臨んだにもかかわらず、前半グループの実習は施設内のスタッフと連携が十分とれたとはいえなかった。後半グループの実習は、いくつかの改善を試みたことはもちろん療養部長やケアリーダーの積極的な介入や看護主任が研修を終えて学生指導に積極的に参加したこと、学生が、地域看護実習を終えてきていることなどにより、学生が利用者やスタッフとの関係性を高めることができ、老人看護を深めることができた。

今後はさらに総合実習を行うための学生の準備状況を整え、施設側とよく話し合いながらよりよい実習環境づくりや実習指導体制をとりたいと考えている。

## 謝辞

本実習にあたりご指導ご協力いただいたS老人保健施設の皆様方に、心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 厚生省統計協会：国民衛生の動向，1999.
- 2) 宮崎和子監修：B老人保健施設における看護活動と観察，看護観察のキーポイントシリーズ 高齢者，116-121，中央法規出版，1997.
- 3) 石山久著：特養と老人保健施設 その共通点と相違点，老年看護学 カリキュラム案とその展開，40-44，医学書院，1996.
- 4) 厚生省老人福祉局監修：高齢者ケアプラン策定指針，厚生科学研究所，1998.
- 5) 石山久著：効果的な実習のために あたりまえの生活感覚を大切に，老人看護 カリキュラム案とその展開，45-50，医学書院，1996.

## **Practical Learning Care Skills at Health Service Facility for The Elderly For Better General Practice for Undergraduate Students of Nursing**

Wakako Kushiro<sup>1)</sup>, Masako Minamikawa<sup>1)</sup>, Tomoko Kamei<sup>1)</sup>

We conducted practice for sophomore students of the St. Luke's College of Nursing at health service facility for the elderly. The purpose of the practice is to learn care skills for elderly patients and their family.

Eight students were participated for a ten-day practice. They were randomly divided into two groups according to time of initiating practice, i.e., four students were assigned to first practice group and remaining students assigned to latter group. Despite meetings with care staff of the facility, students of the first group were not able to establish good communication with care staff and they could not actively participate the care program. Students of the latter group were informed about these problems and they tried to improve communication with care staff and residents. They could participate care program more actively and their satisfaction with the practice was better.

Our experiences suggest that awareness of importance of communication both by students and care providers such as staff leaders and head nurse are important to improve efficacy of general practice. We assume this is particularly important for students of nursing who practice in health service facility for the elderly.

Finally, constructing better practice environment as well as proper leadership adjusted for students' ability before initiating practice will enhance efficacy and usefulness of practice.

### **Key words**

general practice, gerontological nursing, health service facility for the elderly, residents, nursing, care

---

1) St. Luke's College of Nursing